

『風と共に去りぬ』と母性の問題

Gone with the Wind and the Issue of Maternity

衣川 清子
Kiyoko Kinugawa

The popularity of *Gone with the Wind* is attributed to many causes. This article discusses how the novel is women-centered and how (the lack of) maternity is stressed (and condemned) in the heroine's life. This, it is argued, is one reason why the novel is so popular.

『風と共に去りぬ』の衰えない人気の秘密はどこにあるのか。作者マーガレット・ミッチェルの生前に40カ国で800万冊を売り上げ、その白人中心・黒人差別的 content が近年とみに問題視されているにもかかわらず（注1）、根強い人気を博している理由はどこにあるのか。

アメリカ史の中で最も悲惨な経験の一つであり、今でも南部人がその屈辱を忘れていない南北戦争とその後の再建時代が舞台であること、スカーレット・オハラという印象的な人物像を創造し、彼女とレット・バトラーとの恋愛と葛藤と別れを軸とした壮大なロマンス小説であること、そしてまた、原作にあった社会的に不穏な要素を排除し、画面の美しさと迫力を最大限にまで高めた同名映画の存在などがこの小説の人気を支えていることは想像に難くない。しかし本稿では、とくに母性をめぐる言説に注目し、この小説の「3F」（女性作家による、女性読者のための、女性を主人公として書かれた小説）性（注2）に人気の秘密を探ってみたい。

1. 3つのF

『風と共に去りぬ』の最初の二人の読者は、女性ではなく男性であった。最初の読者はマーガレット・ミッチェルの夫ジョン・マーシュであり、二人目はスーツケース一杯のタイプ原稿を託されたマクミラン社の編集者ハロルド・レイサムである。

1926年、足のけがのせいで外出できなくなったマーガレットは、新聞社を辞め、夫が図書館から借りてきた本を読むことで退屈を紛らしていた。かつて『アトランタ・ジャーナ

ル』紙の記者であったジョン・マーシュは、そんな彼女に創作を勧め、毎日帰宅すると、その日にマーガレットが書いた原稿に目を通し、必要な助言を与え、書き続けるように励ました。レイサムは、ジョンがいわば産婆役を務めた作品を客観的な目で読んだ最初の読者である。原稿を読み、編集者の本能で作品のマーケットビリティを見抜いたレイサムによって出版が実現する。

元編集者と現役編集者による校閲を経て産声を上げた『風と共に去りぬ』はたちまちベストセラーになるが、それを支えたのは多くの熱狂的な女性読者だった。1929年の大恐慌から引き続く大不況時代のただなかであって、本は決して安価なものではなかったが、6ヵ月もたたないうちに国内で100万部が売れ、マーガレットのもとには連日熱心な女性ファンからのファンレターが殺到した。読者の心には、辛い現実をしばしの間だけでも忘れ、きらびやかな世界の夢物語に浸りたい願望もあったであろうし、またどんな不運に見舞われても敗北を認めず、明日に希望を託すスカーレットの姿に励まされた読者も多かったであろう。乗り気ではなかったデイヴィッド・セルズニック監督に映画化権を買い取るよう強く進言したのは彼の秘書ケイ・ブラウンであった。女性たちはみなスカーレットに憧れ、映画化のためのヒロイン探し（スカーレット・フィーヴァーと呼ばれた）が始まると、それに参加しようと女性たちが全国から殺到し、大騒動となった。

現在でも、『風と共に去りぬ』の人気は女性たちが支えていると言っても過言ではない。女性の観客をターゲットとする日本の宝塚歌劇団がこの作品を取り上げて大好評を博したことがまさにこのことを証明しているし、アトランタにある「タラへの道ミュージアム」でも、来場者のほとんどは女性であると聞く。

そのような女性たちにとっての憧れの的はスカーレットである。その強烈な個性、「美人ではないが彼女の魅力に捕らえられない男はほとんどいない」（注3）ような魅惑的な美しさ、戦火のもとで窮乏のどん底に突き落とされ、野働きの奴隷と同様の境遇に陥っても屈服することのない強さ、「明日は明日の風が吹く」と宣言する不屈さがスカーレットにはある。困難を乗り越えて生きる女性の物語は、時代や舞台は変わっても、自分らしく生きようとすれば必ず因習や伝統の壁にぶつかることを宿命づけられた女性の物語であるからである。

反面、彼女は身勝手さで残酷で傍若無人であるが、彼女の影のようによりそうのが彼女とは対照的な、善人そのもの、レットのいわく「最も偉大な淑女」（p.1012）たるメラニー・ウィルクスである。人を疑うことなく、夫を心から愛し、他人の子どもも含むすべての

子どもを慈しみ、愛娘を失って自暴自棄になっているレットを慰め、スカーレットにさえ、最後にはその無私の善良さを理解させるメラニーは、「現実離れしている」という批判はあっても、物語の中での存在感は大きい。

そして女性像というならば、彼女たち以外に二人の印象的な女性を挙げておかなければならない。スカーレットたち三姉妹の母親エレンと乳母マミーである。スカーレットとメラニーの一世代前に属するエレンは、安定した南部プランテーション制度を実質的に支えてきた南部淑女の典型である。彼女の夫ジェラルドは、アイルランドの貧農出身で、自らの才覚と大胆さだけで大プランテーションを築き上げてきた。彼は短気で威張っているが、その威厳はエレンの存在によって支えられている。プランテーションはどこでも、奴隷たちを監督し、家事をこなし、子どもたちを育て、家計を管理する女主人の手に委ねられてきた。エレンの静かな威厳と美しさ、上品さはスカーレットが理想とするところであり、逆にスカーレットの淑女教育の失敗を示すお手本としても際立っている。

マミーはエレンの実質的な右腕として力を発揮する。どこまでも主人に忠実な乳母として、エレンを助けて実質的にスカーレットを育てたのは彼女である。エレン亡き後、マミーはスカーレットと彼女の子供たちの乳母を務める。小説の最後の場面で、レットを失ったスカーレットが最後のよりどころとして思い浮かべるのは、故郷タラと、そこに悠然と構えていていつでも抱きとめてくれるはずのマミーの広い胸である。

これら四人の女性像と比べると、男性たちはどうしても影が薄くなる。レットを別とすれば、スカーレットの心の中で幻影としてだけ機能していたアシュレーがいるくらいで、妻のエレン亡き後のジェラルドの父権は消滅しているし、スカーレットの二人の夫も彼女に翻弄された末、あえない最期を遂げる男たちとして記憶されるにとどまる。

女性作家マーガレット・ミッチェルによる、女性読者のための、スカーレットを初めとする女性主人公たちを配した物語——これは3Fストーリー以外のなにものでもない。

2. つくられる南部淑女

四人の女性像と母性との関係を検討する前に、スカーレットがそうなるべく教育を受け、そうなりたいと一方で願いつつ、結局のところ無知と反発と時代とが災いしてそれになりそこなう南部淑女の作られかたを見ておきたい。

南部淑女はつくられるものである。それは南部のプランテーション経済を下から支え、その拡大再生産と永続化のために不可欠な装置である。一般にまず彼女は、家柄の上で、

数世代前から上流階級に属する家系の出身でなければならない。自身そのようにして淑女となった母親と彼女にずっと仕えてきた黒人の乳母から、彼女は徹底した淑女教育を受けていなければならない。社交界へのデビューから、家柄と財産のある結婚相手の探索が始まる。美しい身なりと躰の行き届いた作法、決して知性をおもてに出さない態度が必須である。急がないと、20歳になったらもうオールド・ミスと呼ばれる。

結婚すると、彼女たちの生活はがらりと変わる。ウェストをできるだけ細く締め上げ、たわいないお喋りやダンスに興じていた娘も、ひとたびプランテーションの女主人になった日からは、夫には絶対服従しつつ、プランテーションの発展を第一目的として、その精神的支柱として全ての作業を統括し、子供を生み育て、奴隷たちの日常生活にまで気を配るいわば管理人に変身するのだ。

この南部淑女の典型がタラ荘園の女主人エレン・ロビヤール・オハラとその直系の次世代としてのメラニー・ウィルクスであるとすれば、この小説のヒロイン、スカーレット・オハラは南部淑女になろうとして失敗し、しかしその過程でプランテーション経済破綻後の新しい経済社会秩序を生き延びることに成功した女性、ということができるであろう。

未熟な16歳のスカーレットにとって、32歳の母エレンは行動の模範であり、娘がいつまでも甘えられる大人である。彼女にとっては母親以外のエレンを思い浮かべるのは不可能であるが、実際にはそうではなく、自らの意思でタラの女主人になることを選んだのである。作者はサヴァナの古い由緒ある家系出身のエレンがどのようなわけで身分も定かではない、父親のような年齢の短気で粗野なアイルランド人ジェラルドと結婚するに至ったかを読者に明かす。恋仲だった従兄フィリップの死に動揺した彼女は、一晩泣き明かした末、ほとんど衝動的に、しかし決然とジェラルドの求愛を受け入れたのであった。以来彼女は夫に仕えながら、六人の子供を産み（三人の息子は幼時に死亡）、三人の娘を育て、乳母マミーと共に他の奴隷たちを管理し、貧乏白人を含む隣人たちにもその慈愛を振りまいてきたのであった。

ジェラルドとの結婚を受け入れたときには、彼女は感情を失った「抜け殻」であった。彼女は淑女教育の教えを実践し、夫をもり立てて大農園の運営を円滑にしてきたが、死を目の前にして、つくりものの淑女の仮面がはがれ、ずっと抑圧してきた感情があふれ出る。うわごとで、ジェラルドではなく、恋人の名を呼ぶのだ。スカーレットには理解できず、読者だけがその意味を理解できるこのエピソードは、タラの女主人としての二十年間があっても、淑女というものが人為的な、真情を押し殺してはじめて成立するものであるこ

とを示していよう。

エレンが結婚したのは15歳であったが、徹底的なロビヤール流の淑女教育の成果がいかに発揮され、経験豊かな乳母マミーを含む内働きの奴隷20人の導入によって、クラは繁栄を享受し始める。ではその淑女教育とはどんなものか。

男は財産を所有し、女はそれを管理する。管理がうまいという名声は男が取り、女は男の才覚を賞賛する。男は、指に棘がささっても雄牛のようにうなる。だが、女は出産の時ですえ、男のじゃまになりはしないかと、うめき声をおさえる。男は乱暴で、しばしば酔っ払う。女は、どんなひどいことをいわれても、知らぬふりをして、文句もいわず酔っ払いを寝台へ連れて行く。男は不作法で、思ったままを口にだす。しかし女は、つねに親切で、やさしく、寛容でなければならない。エレンは偉大な貴婦人の伝統の中で育てられた。それは、生活の重荷に耐えながら、しかも自らの魅力をたもつには、どうしたらよいかを彼女に教えた。(p.61)

いいかえれば、淑女の人生は、「生活の重荷に耐え」ることなのだ。20世紀の読者ならば、ここにくすぶる怒りを感じとるのもそう難しいことではあるまい。ましてや、マーガレット・ミッチェルの母メイベルが婦人参政権運動に関わっていたことを考えれば、エレンの世代ならともかく、この箇所を読み飛ばすことはできないであろう。女性には財産権も才覚もないものとされ、つねに男性に従属し、横暴に寛容をもって応えなければならないとされているのである。スカーレットはその後、ここでの女の役割をすべて実質的に投げ捨て、どちらかという男の役割を演じることになるが、この点は後述する。この淑女教育からわかるもう一つのことは、「男は財産を所有」するものであって、もし財産がなければそれ以降の全てが無効となる点である。別の言い方をすれば、これはプランテーション経済のような、世襲なり、購入なりによって土地や奴隷のような財産が安定的に存続することを前提としたしくみである。

エレンはマミーの力を借りながら、娘たちにプランテーション存続の鍵となるこの教育を施そうとする。そして次女スエレンと三女キャリーには一定の成功を収めたが、スカーレットに限っては失敗する。彼女は「淑女としての外見」だけしか覚えなかったのだ。南部淑女の宿命になど頓着せず、美しく着飾ることと男の気を引くやり方にだけは習熟した。「ジェラルドゆずりの強情と激しい気性」がスカーレットの教育を妨げる主因だ、とエレンとマミーは結論づける。しかしスカーレットは淑女教育に反発を覚えているのではない。できの悪い生徒だが、「心から母のようになりたいと思っていた。しかし、ただ一つ困る

のは、正義で真実で従順で自己犠牲ということになると、ほとんどすべての人生の享樂をとりながし、多くの愛人たちを失ってしまわなければならないことだった。」(p.63)

「正義で真実で従順で自己犠牲」をすべて難なく実践しうるのがメラニーである。スカーレットは、淑女の役割を演じる覚悟ができていないばかりか、淑女たることの内実も理解していない。彼女はひたすら、アシュレーから求婚を受け、アシュレー夫人となることしか考えていない。白馬の騎士にあこがれる少女のように、そこにあるのは無知と未熟さと虚栄心だけである。

当然ながら運命は彼女の思い通りには運ばない。アシュレーは自分と同じく物静かで読書を好み、家庭的なメラニーを妻に選ぶ。アシュレーを翻意させることができないと悟ったスカーレットは腹いせに、折よく手中に飛び込んできたメラニーの兄チャールズとの結婚を決めてしまい、結婚した南部淑女の運命という現実と直面する。しかし、折からの南北戦争の勃発により、妻に対する夫権／父権を発揮する暇もなく夫はまもなく出征し、戦病死する。短い結婚生活からスカーレットが学んだことは、初夜の現実、不本意な妊娠と出産、そして未亡人の生活の暗鬱さであった。

3. スカーレットとメラニー

『風と共に去りぬ』を読んだ読者がスカーレットについてばかり感想を述べるのに辟易した作者マーガレット・ミッチェルは、「この作品の本当のヒロインはメラニーなのです」(注4)と釘をさした。しかし小説の幕切れで、愛した男に去られるけれどもともかくもスカーレットが生き延びるのに対して、メラニーの体は二度目の妊娠に耐えられず、夫のアシュレーと息子のボウの行く末をスカーレットに託して死ぬ。彼女は、新しい社会秩序の成立を前に、退場しなければならなかった古い世界の象徴であった。彼女の人間的な美点が意地悪で残酷なスカーレットをはるかに凌駕していたとしても、「生き延びる」というこの小説の課題に照らせば、メラニーはヒロインたりえなかったと結論づけることができる。

あるいはこのような見方もできるかもしれない。メラニーの存在と彼女の静かなしかし確固たる信頼に支えられていたからこそスカーレットはサバイバル能力を発揮することができたのだ。メラニーの死の床で、スカーレットは自分とは正反対の性格の、人を疑うことを知らない義妹の存在にどれだけ力づけられ、支えられてきたかを悟る。だとすれば、両者の中に、マーガレット・ミッチェルにとっての理想のヒロイン像が振り分けられてい

たのかもしれない。

しかし、古い秩序の屋台骨が崩れていく激動の時代に生まれてしまえば、古い価値観に従って養われた技能と訓練は、安定した旧制度のもとでなら有効に機能したはずでも、新しい時代には対応できない。古い世界の美しさに心を奪われ、その時代の尺度に従ってしまうアシュレーや「似た者」メラニーは、むきだしの時代の変化に適応する勇氣と活力を全く欠いている。

しかし、これは単純に言えば、心優しい善女が滅び、したたかな悪女が生き残る物語である。善女は子供欲しさに体に無理を強いて力つき、かたや悪女は三人の男性と次々に結婚し、三人の子供を軽々と生み落とし、夫や子供や温かい家庭といったものには無関心に、金儲けに奔走する。時には自分の無慈悲さと金に血道を上げる生き方に対して良心の呵責にさいなまれもするが、そのたびに「今は考えまい、明日考えよう」と先延ばしして翌日になればそれを忘れてしまう。この悪女が最後に支払う代償は、ただ一人愛していたと遅ればせながら気づいた男を失ってしまうことである。しかしそれでも彼女は懲りない。何十回めかの「今は考えまい、明日考えよう」を呪文のように唱えて生き延びていくのだ。

ヒロインはまぎれもなくスカーレットである。どんなにわがままで意地悪で虚栄心にあふれていようと、彼女こそが南北戦争とそれに引き続く再建時代の南部の荒廃、両親の死、二人の夫の死、娘の死、よき理解者であった義妹の死、三人目の夫の出奔といったたび重なる試練を経ても立ち上がり、生き延びようとする不屈のヒロインである。しかし読者がスカーレット像を想像する時、彼女が愛情を感じることなく三人の男と次々に結婚し、三人の子供を持つ身であることは容易に意識に上らないであろう。物語の最後に我々が目撃するスカーレットは、冒頭での双子の崇拜者に言い寄られる白いドレスを着た緑の目の少女とあまり変わりがないように思われる。実際、母としてのスカーレットを想像することは、母でないエレンやメラニーを想像するのと同じくらい難しい。

3. マーガレットとスカーレットとメラニー

マーガレット・ミッチェルはスカーレットとメラニーとの間で揺れている。人間的な美点という点で、また古き良き南部の正当な後継者としてメラニーに軍配をあげつつも、最終的に彼女は滅びる運命にある。それは古き良き南部が滅びていったのに対応する。一方、マーガレットは1920年代の新しい女であり、スカーレットの持つ強さや伝統に反逆しようとするエネルギーに魅せられてもいる。スカーレットは生き延びるけれども、その欠点の

指摘には容赦がない。このあたりの作者の揺れと葛藤を説明するのが「母性」の問題ではないかと考えられる。

「母性」はスカーレット、メラニー、エレン、マミーの四人に共通する要素である。これには、①子どもを産んだ母親であることと、②子どもを産んだかどうかにはかわりなく、母性的な性格を備えていることがある。「母性」とはここでは、「女性が、自分の産んだ子を守り育てようとする、母親としての本能的性質」（注5）と「母親の本能」として世間が想定する、いわばあるべき母親像の両面があることをここでは想起しておきたい。

マミーを例に、母性の問題を考えよう。他の三人には子どもを産んだ経験があるが、マミーの場合には、その経歴はいっさい語られない。エレンの娘時代から長い間彼女に仕えてきて、忠実で有能な乳母としてエレンの娘たちもしっかり育ててきたという自負をもっている点は強調されても、彼女自身の人生についてはひとことも触れられていないのは不思議である（料理女のディルシーには娘がいることが冒頭から明示されていることと比べると、不自然でさえある）。夫がいるのかどうかさえ定かではない。

しかし、スカーレットに対するマミーの役割は、彼女を産んだのではないという一点を除いて、母性そのものである。プランテーション全体の管理だけでなく困っている隣人たちにも援助の手を差し伸べるという、奴隷や隣人を含めた「拡大家族」の母親役を務めることに忙殺される母エレンに代わり、上着を着るとか、お客をきちんともてなせという日常的身辺的な事柄に気を配り、スカーレットの思惑など見通しているマミーのほうが、一幅の絵のように理想像として静止しているエレンよりも、母親的である。

エレンはスカーレットにとって、規範として機能している。彼女が新しい、しばしば淑女らしからぬ行動に踏み出すときは、いつも母が今の自分を見たらどう思うだろうか、という意識がきざす。しかし「エレンの目にどう写るか」というこの道徳的抑制も、次第に力を失っていく。規範侵犯を繰り返すうちにショックが薄れ、代わりに必要性和情性が支配するからである。

エレンは奴隷たちや近隣に住む貧乏白人たちにまで親切心を施す。自分の息子だけでなくスカーレットの子どもたちも可愛がり、他人に親切にする点でメラニーとエレンは共通している。皮肉にも、二人の死は母性の発揮と関係している。エレンは、病気の貧乏白人の娘を看護するうちに自ら感染して落命するし、メラニーは医者から止められていたにもかかわらず第二子を妊娠したために死ぬ。慈悲深い母親らしく他人の面倒を見たり、母親としての本能に導かれ、子どもを欲した結果が死につながるわけである。

エレンとメラニーの母性と比較すると、母親であるスカーレットのそれとは大きな違いがある。同じなのは子どもを産んだことがあるという点だけで、スカーレットは自ら産んだ子供たちを可愛がることもなく、彼らおよび夫や隣人たちに母親らしい気遣いを示すこともない。だからといって彼女を頼る子どもや元奴隷に対して無責任であるわけではない。むしろ、夫を亡くし、母を亡くし、父を頼ることができない状況で、彼女は一家の稼ぎ手として、彼らを扶養し保護するために奔走する。肉体的に母親になる適性は十分である。つわりもなく、異常なほどの安産と回復力とでマミーさえも驚かすのであるから。

タラの税金を支払うため、妹の婚約者を騙してフランク・ケネディ夫人に納まったスカーレットは、税金を完済した後、製材所の経営に乗り出す。夫の店の仕事を手伝うという慎ましい内助の功ではなく、自ら経営者となるという事実だけで十分にスキャンダラスであったが、彼女の経営手法は効率優先・収益第一の徹底したもの（注6）で、さらに女性経営者であることの物珍しさをも武器に、冷血のビジネスウーマンぶりを発揮する。そんな折、彼女は妊娠する。「赤ん坊のことを考えることがあっても、それは、都合の悪いときに生まれるという、いわば行く手を妨害される怒りをもって考えるだけだった。「死と税金と出産！こればかりは都合のいいときなんて絶対になんだわ！」（p.659）

スカーレットにとって、生まれてくる子どもは、彼女の「行く手を妨害」するもの以外のなにものでもない。母性とはかけ離れたこのスカーレットの態度は、子供好きなレット・バトラーに批判される。彼はスカーレットとの間に生まれたボニーを溺愛するだけでなく、父親が違ふほかの2人の子供たちをも可愛がる。二人の間の葛藤といさかきが激しさを増すのが子供をめぐるものであるのも興味深い。もう子供を産みたくない、と宣言したスカーレットがレットと同じ寝室で寝るのを拒否したことから二人の歯車は狂い出すのである。レットの愛娘のボニーが落馬事故で死んだとき、少なくともレットの側には、彼をスカーレットにつなぎとめるものは何もなかった。

スカーレットが妊娠や出産の現実を目覚めてから、妊娠や出産や子どもをめぐる苦情を訴えている個所を探せば枚挙にいとまがない。スカーレットは、肉体的にも、また機会の点でも母になる資格を十分すぎるほど与えられているのに、それを拒否し、子どもも自分の母性をも、厄介者であるとしかとらえることができない。これほどまで母性を嫌悪するのはなぜであろう。裏返せば、母性に対するマーガレット・ミッチェルのこのこだわりは何であろう。

4. マーガレットとスカーレットの岐路

作者マーガレット・ミッチェル(1900～1949)は、スカーレットがそうであったように、古い時代と新しい時代のはざまにいた。アトランタ生まれのミッチェルは祖父母ら、南北戦争を実際に体験した人々の語る話にじかに接し、古い時代の価値観や美点、南軍の勇猛果敢さの思い出を繰り返し聞かされて育ったため、10歳まで敗戦の事実を知らなかったほどだという。一方で彼女の青春時代は、第一次世界大戦を経て1920年代のフラッパーの時代にさしかかろうとしていた。婦人参政権運動に献身する母親メイベルとの愛憎なかばする葛藤、婚約者の戦死、北部の大学入学と学業不振、母の死と帰郷、最初の結婚の失敗、新聞記者修行など、波乱の多い前半生を送った。

おてんば娘、強情者、ダンスの名手、男の子の間では人気があったが同性には敵が多かった女の子、因習への反抗者、流行のフラッパー、それが1900年生まれのマーガレット・ミッチェルの娘時代であった。これらはまさにスカーレットを彷彿とさせるものである。スカーレットが恋のさやあてから愚かにも好きでもない男との結婚に飛び込んでしまったところは、「結婚式の日間違った男を選んだことに気づいた」(注7)というマーガレットの、最初の結婚の失敗を思い起こさせる。

一方、マーガレットにとって、母親との関係は大きな影響を及ぼした。スカーレットにとって母は理想的な南部淑女のモデルであったが、彼女とマミーが教えたように、知性を隠しておくことができなかったし、自分の意見をはっきりと主張した。マーガレットの母メイベルが娘に最も伝えたかったことは、手に職をもって自立することであった。勉強を嫌がる幼いマーガレットをジョーンズボロ近郊の荒廃したプランテーションの跡地に連れていき、教育をつけなければ滅亡の道を辿るしかないと言った。両親は彼女を医者にしたかったらしい。しかし母がインフルエンザにかかって死んだとき、北部の大学に通っていたマーガレットはあまり振るわなかった学業を諦めてアトランタに戻り、残された父と兄の世話をする決心をした。マーガレットもスカーレットも、母による教育が完成する前に母を亡くしているわけである。

マーガレットは結局、母の歩んだ道をたどってはいこうとはしなかった。特に二度目の結婚生活に入ってから、「この家庭には二人の稼ぎ手をおく余裕はない」(注8)と言って新聞記者の仕事を辞めている。後に彼女を大金持ちにのし上げる『風と共に去りぬ』も、出版するつもりは毛頭なかった。スカーレットは「金がすべて」とばかりに、眉をひそめる夫や友人たちの反対を押し切って製材所を経営し、冷徹なビジネス感覚と巧妙な立ち回

りとでかなりの利益を上げる。あくまで家庭を最も重要なものとするマーガレットと家庭や家族が商売の邪魔になると感じるスカーレットとの大きな隔たりに注目しておく必要がある。

ヒロイン・スカーレットの強烈な個性と行動には、間接的な形でマーガレット自身の葛藤と苦悩が反映されている。もちろんスカーレットはマーガレットか、などという単純な問題ではない。作者＝語り手がスカーレットをとらえる視線は終始冷静・冷徹である。地の文の中で、うぬぼれ、無知、冷酷さといった彼女の弱点は容赦なく指摘されているし、さらに鋭い洞察力を持つレット・バトラーという男が配され、最初からスカーレットの正体が容赦なく暴かれる。バトラーいわく「最も偉大な淑女」であるメラニーと常に比較されることで、スカーレットの性格的欠点が鮮やかに強調される。

しかし、最初の結婚に至るまでのマーガレットの生き方は、社会のお上品な伝統に対する反抗者としての姿であり、南部淑女への道から逸脱しながら、混乱の時代にあって生きるために闘わなければならないスカーレットの姿と二重写しになる。しかしその後は二人の進路は離れるばかりである。スカーレットは二番目の夫、商人のフランク・ケネディ夫人となった後、有能でいささか残酷なビジネス・ウーマンになっていくのに対し、ジョン・マーシュ夫人となった後のマーガレットは仕事を辞めて家庭に生きがいを求める。『風と共に去りぬ』の成功で大金を手にした後も、夫よりも収入が多いことを知られるのをひどく嫌ったという。

マーシュ夫妻には子供がなかったが、マーガレットは子供が好きで甥や姪の面倒をよく見たという。対照的に、スカーレットは母性のイメージが薄い女性として描かれている。愛情を持っていない夫の子だから愛せないという要素もあるであろうが、彼女の描写はもっと徹底して、妊娠、出産、子育てなど、子供一般に関わることを嫌うものとしてなされている。どうしても子供が欲しいと願い、次に妊娠したら母体の生命が危ないと警告されていたにもかかわらずメラニーが妊娠し、そのために命を落とすのと対照的である。

マーガレット・ミッチェルが好んだ古い世界のように、南部淑女の理想型であるエレンやメラニーは残された人々の心に消えがたい印象を残しながら退場し、母性に欠けるスカーレットは、最後に自分の真情に気づいたところで愛する男に去られる。失ったものがいかに大きいかを彼女は悟る。そして残されたものがいかに厄介なものかも。彼女はこれから、自分の二人の子ども、メラニーから託されたアシュレーと彼らの息子の面倒を見て

いかなければならない。母性を嫌悪するスカーレットにとって、そのような生活のどこに夢があるのだろうか。無知は幸いであった。すべてを知った今、彼女は本当の意味で人生の現実と直面し、「明日は明日の風が吹く」わけではないことも知りつつ、生きていかなければならないのである。マーガレットがスカーレットのために用意した運命がこれであった。

注

- 1 青木富貴子『「風と共に去りぬ」とアトランタ』（岩波新書、1996年）、5ページ。
- 2 野崎六助『アメリカン・ミステリの時代』（NHK ブックス、1995年）、185ページ。
- 3 Margaret Mitchell, *Gone with the Wind* (The Macmillan Company, 1936; New York: Warner Books Inc., 1993), p.5. 以下、テキストからの引用は文中にかっこでページ数のみを示す。
- 4 アン・エドワーズ『タラへの道——マーガレット・ミッチェルの生涯』（大久保康雄訳、文藝春秋社、1986年）、194ページ。
- 5 『新明解国語辞典』（三省堂、1996年）、「母性」の項。
- 6 人件費を最小限に抑えるために囚人労働までも導入する。
- 7 マリアン・ウォーカー『マーガレット ラブ・ストーリー』（林真理子訳、講談社、1996年）、101ページ。
- 8 Anne Goodwyn Jones, *Tomorrow is Another Day* (Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1981), p.314.

テキストは、Margaret Mitchell, *Gone with the Wind* (The Macmillan Company, 1936; New York: Warner Books Inc., 1993)を使用した。訳文は大久保康雄、竹内道之助共訳、文藝春秋社版を使ったが、筆者の責任で改めたところもある。